



母語獲得過程を考慮した教授法開発にむけて:WH疑問文誤用例の通言語的比較研究

著者名	遠藤 美香
雑誌名	東京女子医科大学雑誌
巻	89
号	1
ページ	29-29
発行年	2019-02-25
URL	http://hdl.handle.net/10470/00032301

doi: 10.24488/jtwmu.89.1_27(https://doi.org/10.24488/jtwmu.89.1_27)

repeat (STR) 解析が用いられている。環境への曝露などでDNAが変性した場合にSTR解析は困難となることがあるが、変性DNAの解析に適した方法は確立していない。今回は、DNA試料が変性した後においても解析可能なSNPsの同定と変性試料のSTR解析に対する全ゲノム増幅の有効性について報告する。

変性DNAで解析可能なsingle nucleotide polymorphisms (SNPs)を特定するため、amplified fragment length polymorphism (AFLP)法によりSNPs解析を行った。次に、変性DNAのSTR解析に対する全ゲノム増幅法の有効性を検討するため、変性DNA0.5 ngと5 ngについて全ゲノム増幅した後、STR解析を行った。

AFLP解析の結果、変性・未変性試料に共通に見られるバンドから抽出したDNAの塩基配列中にはSNPs17個が存在した。そのうちマイナー対立遺伝子頻度0.01以上のSNPsはrs144344421であり、DNAが変性した場合においても、個人識別に利用できる可能性があると考えられた。次に、全ゲノム増幅前後のSTR解析の結果では、変性時間が長くなると、DNA5 ngを用いて全ゲノム増幅した時のSTR検出数がDNA0.5 ngを用いて全ゲノム増幅した時や全ゲノム増幅を行わない時のSTR検出数よりも多い傾向がみられた。以上の結果から、変性試料のDNA解析では、(1) SNPsを用いる、(2) STRを用いる場合は、DNA5 ngで全ゲノム増幅を行うことによって解析成功率の上昇につながると考えられた。

7. 母語獲得過程を考慮した教授法開発にむけて：WH疑問文誤用例の通言語的比較研究

(英語)

遠藤美香

生成文法理論の原理とパラメーターのアプローチでは、自然言語間での共通性をとらえた「原理」と、言語の多様性をとらえた「パラメーター」によって、「刺激の貧困」の問題にもかかわらず言語獲得が可能であることに、説明の枠組みを与えてきた。「母語として獲得される言語知識 (L1) と学習によって得られる言語知識 (L2) の違いは何か？」という大きな問いにこたえるべく、その基礎研究の手始めとして、本発表では、英語を母語として獲得中の子どもの産出するWH疑問文、および英語を目標言語とする学習者の産出するWH疑問文を分析対象とする。特に、目標言語からの逸脱形、誤用例を取り上げ比較する。その際、英語学習者の母語に注目し、日本語に加え、中国語・ドイツ語等、通言語的比較検討を行う。

母語獲得においては、その過程で目標言語から逸脱した形式を生成する状態が生じたとしても、「否定証拠」といった明示的な教示なしに、当該言語の最終状態に到達できる。一方、言語学習では、目標言語からみて逸脱した形式が産出される場合は、それを訂正するための教示

が可能である。その教示を行う際、学習者がより効率的に訂正が行えるよう、どのような要因が誤用産出にかかわっているのかを母語獲得との比較において検証し、明らかにしようとするのが、本研究のめざすところである。具体的には、パラメーターの値設定に起因するものと、英語特有の規則性に起因する産出例を分けて論じた。

8. シミュレーションおよびICTを活用した臨床技能教育プログラムの取り組み

(¹医学教育学, ²整形外科, ³化学) 山内かづ代¹・

萩原洋子²・岩倉菜穂子²・

佐藤 梓³・久保沙織¹・長田義憲²・

岡崎 賢²・大久保由美子¹

〔緒言〕超高齢社会を迎え、外来傷病分類別で筋骨格系疾患は循環器系と並び第2位を占める。四肢脊柱の適切な身体診察および臨床推論に基づく診断能力の高い医師の育成が求められ、卒前卒後を通じ、診察技能教育は重要な課題である。本研究の目的は、医学部整形外科臨床実習における初診患者診察シミュレーション教育の介入が、四肢脊柱の診察技能を向上させるか否かを検証することである。〔対象と方法〕対象は整形外科臨床実習を行った医学部5年生のうち、外来診療に参加した90名である。方略1) 外来実習前日に症例を基盤とした学生同士のアドリブロールプレイによる整形外科初診患者診察シミュレーションを実施、指導医による個別フィードバックを行った。方略2) 整形外科外来において、学生が初診患者の診察を実施、指導医が患者診察能力を簡易版臨床能力評価法 (mini-Clinical Evaluation Exercise: Mini-CEX) で評価し個別フィードバックを行った。評価方法) 方略2の前に方略1の初診シミュレーションを行った群を介入群 (N=64)、スケジュール等の理由で方略1を行わなかった群を非介入群 (N=26) としてMini-CEXスコア (医療面接、身体診察、コミュニケーション、臨床推論、プロフェッショナリズム、マネージメント、総合臨床能力) を比較した。〔結果〕両群間に症例内容、難易度およびMini-CEXの経験回数に差はなかった。Mini-CEXスコアのうち身体診察、臨床推論、総合臨床能力において介入群が有意に高値を示した ($p<0.05$)。〔考察〕臨床実習の場で実践的なシミュレーションとフィードバックを組み合わせたプログラムを構築・実践したことで四肢脊柱臨床技能を、超短期的、平均的には向上させた。しかし獲得能力に個人のばらつきがあり、標準的に臨床技能を獲得・定着できているとは言い難い。学修者個人の認知負荷の不足が一因の可能性があり、今後獲得能力の質評価、中長期的評価およびプログラムの質的改善を要する。